『比較民俗研究』2．1990／9

東方魚文化三題

陶思炎※

魚文化は東方文化体系の中でも最も活力に富んだ支系の一つで，その起源は古く，内容は豊富であり，形式は複雑多様で機能は入り乱れている。それゆえ，終始独特な民間的色彩を帯びてきた。中国，日本，朝鮮，琉球，フィリピン等を主幹とする中国文化圏は魚文化の盛んな地域であり，それらは同源共生，つまり相互に伝播しあい渾然一体となっており，東方魚文化の主要基盤となっている。中国魚文化は東方魚文化の中核として，石器時代に早くも成熟に向かった。同時に，人間の移動と多種の交流に伴い南下東進し，次第に近海列島に広がり，ついには太平洋の彼方まで達した。“秦漢帰化人”の多くが日本に東進する以前に，人間と文化の伝播・交流はすでに始まっていたのである。機能と類型に着眼すると，我々は中国魚文化の東進及び東方魚文化の形成を容易にみることができる。本稿では，三つのテーマを事例に取りあげ略述する。

1．生殖象徴

生殖信仰は「原始」人類の一つの重要な意識活動である。それは，個体が生存するのに傾注する動物的本能を離脱し生命維持についての理解を単純な外界植物の摂取から人類独自の創造へと転換させ，社会の発展を推し進めた。そして，往々として自然界のある種の動物・植物に比喩されたため，これらの動・植物は特定の神秘的な象徴になった。魚類はまさにこれに相当し，生殖の象徴として原始神話中に流伝するだけでなく，民間の習俗にも残存している。同時に，漁農経済を主体とした社会的環境にも大きな作用を発揮した。東方の原始神話の中には，魚類が人又は人と魚の合成体として生存したり，魚が恩恵を賜る描写が多い。中国の『山海経』中の“氐人国”，“陵魚”と“魚婦”等には人と魚の合成体の神話が記載されている。これ以外に，『淮南子』中にも半身半魚の神話記述があるが，どれも仰韶文化彩陶盆上の人面魚の紋相によって実証できる（図１）。魚化した男女，人が遊魚に変わる伝説にいたっては，枚挙にいとまがない。例えば，“高唐女”“懶婦魚”“孟姜女”の類は，人あるいは魚がそれぞれ転化する神話思惟から派生したものである。人と魚がそれぞれ転化する以外に，魚の口から人が生まれる説がある。中国東北のホジェン（赫哲）族の神話では，天神ドウオンリ（都恩力）は泥と海水を用いて幾つかの泥人形を作った。泥人形は大きな魚の口に放り込まれて，生きた人となって跳びはねて出てくるのである。この神話で，魚の口が女陰のメタファーとなっているのは，陝西武功游風出土の陶瓶画“魚呑鳥頭

※東南大学東方文化研究所々長（中国・南京）

図”の生殖象徴の意味を実証できる（図２）。

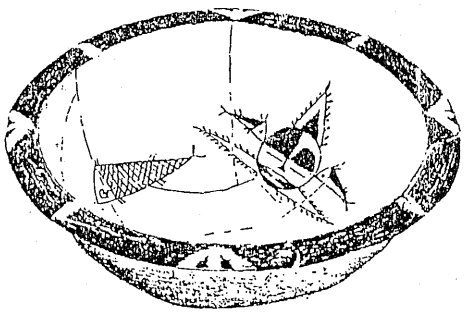


図１　半坡型仰韶文化　人面魚紋彩陶盆　高16.5，口径39.8厘米
1955年陝西西安半坡出土

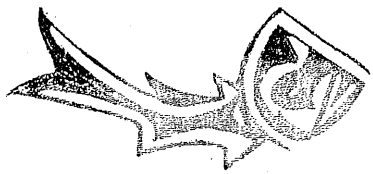


図２　魚呑鳥頭図　彩陶画

太平洋諸島には，人と魚が合体したもの，または，神と魚が合体したものが神話に多く反映されている。マングヤー（曼格亜）人の神話では，人類始祖は“半人半魚”の形であり，“ひとつの眼は人眼，もうひとつは魚眼で，右腹は腕，左腹は鰭，一方の脚は普通の形，もう一方の脚は半分は魚のしっぽ”である。トーレス（托雷斯）海峡のヤップ島では，二人の兄弟が文化英雄になっている神話があるが，一人は鎚魚で，もう一人は鰐である。これ以外に，マオリ（毛利）人神話中の大神タンチアルオア（担加羅阿）も海洋と魚類の化身ということができる。この類の神話観念の相似は本区文化形態の趨勢に基礎をうちたてた。

生殖象徴としての魚は，東方民族の習俗中に多くその要素をみることができる。例えば，韓国民画“孝字図”では，その筆画が横に一本で魚の形，縦に一本で蓮の花とし，“魚が蓮を突き抜ける”のをもって生殖象徴とし，同時に，子孫を得て孝をなすことを表わした。“魚が蓮を突き抜ける”というモチーフは中国の吉祥図案であり，“孝”道観は中国大陸の儒学に源をもつ。しかし，それと魚文化の癒着は民間で育まれた生殖の俗信を主として示している。これ以外に，日本の『古事記』に叙述された“禊払と諸神の誕生”では，イザナギ大神が自己の衣冠束帯を脱ぎ捨てて，それが十二神に変わったことが述べられている。これは水辺の性行為の曲筆である。琉球では，三月が女人の季節で，“三日節”では婦女が“浜辺に下り”不祥を払う。昔は三月三日には船に乗り遊漁する“流船礼”があった。これは明らかに水に下りて祓禊する儀式の一種の変異形式である。禊祓の行事は中国を源とし，三月三日は“上巳節”とも呼ばれている。古代中国では，婦女は水中に卵やなつめを浮かべ争って食べ，そうすることにより，子供を孕むように祈願した。古代誌賦中にも禊祓の行事をみることができる。梁代蕭子范『三月三日賦』では次のように述べている。“酒玄醪于沼沚，浮絳棗于泱池。”又，廣肩吾『三月侍蘭停曲水宴』では以下のように述べている。

禊川分曲洛，帳殿掩芳洲。

踴躍赫魚出，参差絳棗浮。

百戯俱臨水，千鐘共逐流。

詩中では，水に入れて禊祓をして子供を求める婦女達を“赫魚”に喩えている。禊祓はまさに魚を親神になぞられる一種の信仰活動を明らかにしている。それは，求育をもって功利のあるものとなし，原始時期には，水中或は水辺の性行為を伴ったものと思われる。『後漢書』中の“哀牢夷沙壹触沈木而生龍子”の説は，まさに禊祓が水中の性行為を伴っていることを婉曲に言ったものである。実際上，禊祓の風俗は魚類を生殖の象徴とすることにより形成された準宗教性の活動であり，伝播と変遷の過程において，この行為の主体（婦女）と対象（水）には大きな変化はなかったが潜在的な誘因（魚）と初期の功利（生殖）は希薄化し転移した。日本の三月三日は，女の子の日で“ヒナ祭り”とされるが，それと琉球の“三日節”，中国の“上巳節”とは，一脈相伝である。しかしながら，“禊祓”は日本神話の中で，主体が変化し，女性は男性神に変わってしまい，魚に喩えた文脈も徐々に消え失せた。

しかし，その水際の繁殖に関する叙述は相変わらず魚文化の生殖行為と密かに通じあっており，この文化の国境を超え，民族を超えた潜在的な影響関係及びその類型と体系の形成を明らかに示している。

2．昇遷の兆

天が高く地が広いために，生死の境に，あるいは両極・両界の隔たりは，人類の神界・仙界・冥界に対する幻想を引き起こした。中国の古人は神と人と鬼が渾然一体となった世界を二本の“銀河”で隔て，一本は“浮天”，もう一本を“載地”とした。前者は“天の河”で，後者は“冥河”である。“天の河”は神と人を分離し，“冥河”は人と鬼を分離するものと考えられた。古代中国では，人と神界（仙界）・冥界の交流は魚の導きに頼っていた。魚は“神の使い”あるいは“乗り物”として，一切の有形・無形の河や海を跳び越えることができた。同時に，魂を導いて天に上がらせ，地に入らせたり，生者を載せて海を渡り，昇遷させるという神功を有していた。大渓文化中，生魚を土に埋める葬俗があり，商周時期の墓葬には大量の玉魚の従葬がみられる。このような自然魚から文化魚までの変化は，魚が昇遷を表すという観念がより一層発展したことと，魚文化が変遷と整合の過程で強化されたことを示している。秦漢時期の仙道が流行している世の中では，生を求めるのは死に安ずるに勝り，魚文化は次第に亡霊を引導することから生者を濟度するようになった。そこで琴高が鯉に乗って水と戯れたり，子英が鯉に乗って昇天するような仙話が生まれた。

魚が昇遷を象徴するという文化観は日本にも伝わっている。日本の十七世紀の絵画作品には，琴高が鯉に乗って仙に昇る題材がある。これ以外に，日本修学院離宮客殿の杉板門上の絵には『鯉魚図』があり，言い伝えでは，それは毎晩，後園の池まで滑って行き，水と戯れているという。実際は，門上の絵鯉は中国呉地の古俗であり，子英を追慕し昇遷するよう願ったところに真意が

ある。漢代劉向の『列仙伝』巻下には次のように記載されている。

子英者，舒郷人也。善入水捕魚。得赤鯉，愛其色好，持帰著池中。数以米谷食之，一年長丈余，逐生角，有翅翼。子英怪異，謝之。魚言："我来迎汝，汝上背，与汝俱昇天。"即大雨，子英上其魚背，騰昇天而去。歳歳来帰故舎食飲，見妻子，魚复来迎之，如此七十年。故呉中門戸皆作神魚，逐立子英祠雲。

これからも窺えるように，門戸の絵魚は仙界に昇遷する願望を表したものである。そして，呉地と東瀛は海を隔てて互いに眺望しあい，早くから交流があり，そのため，習俗も似ているのである。漢代東方朔『海内十洲記』では以下のように述べている。

瀛洲在東海中，地方四千里，大抵是対会稽，去西岸七十万里，・・・・・洲上多仙家，風俗似呉人，山川如中国也。

"瀛州"は琉球，日本列島の総称であり，興味深いのは中国人が瀛洲を仙境と見なすと同時に，自己の仙道観も相手の方に伝播したことである。

中国文化では，魚は又霊に通じ善く変化するものであり，"魚跳龍門"は卑を尊に転化させ，吉祥図飾（図３）として，貧を脱し富を招来する昇遷の兆となっている。それは，印染，刺繍，木刻，煉瓦彫り，切紙細工，等の多方面に広く応用さている。琉球では，十五世紀に現れた"紅型"の中に，鯉が跳躍し水から飛び出した図案がある。洪武五年（1372年）に琉球と中国は正式な宗属関係に入ったため，朝貢船，商船の往来が頻繁になり，中国民間の伝統図案は印染術の伝授とともに，"東洋"に流れていった。日本では，五月五日は"子供の日"で，どの家の男の子も家の外に紙或は布で作った鯉のぼりをたて，公園でも高くなびいているのを見かける。言い伝えによると，鯉のぼりの習俗は十七世紀の七十年代に始まり，矛・鉞・旗のない普通の人々は子供の平安無事・健康を祈って鯉のぼりをたてたらしい。この日にはもう一つ興味深い習俗がある。それは，子供が布の鯉の旗の頭からは入り，しっぽから出るもので，このようにすることで，前途が順調にいくと伝えられているのである。実際，鯉の旗が風になびいているのは魚が流れに逆らって昇っていきれ龍門に跳躍していくようである。いわゆる鯉は"最も勇ましく，高貴な魚である"という説があるが，まったく言い掛かりである。陶弘景は『本草』で次のように述べている。"鯉魚最為魚之主，形既可愛，又能神変，乃至飛越山湖・・・・"日本の常民が子供達のために鯉のぼりをたてるのは，明らかに中国の"魚が龍門を飛ぶ"の説の影響であり，"神変"の願いを寄せ，後代に卑が尊になることを希求したものである。そのため，昇遷の兆は東方魚文化体系中の突出した要素となっているのである。

３．辟邪鎮物

東方魚文化の中で，魚類は福と援助を賜る恩主であるばかりでなく，邪を祓い禍を取り除く保護神でもある。吉を求めることと凶を避けること，福を祈ることと禍を免れること，神を近づけることと鬼を遠ざけること等の心理は不可分である。それで，この文化では，魚は度々邪を祓い

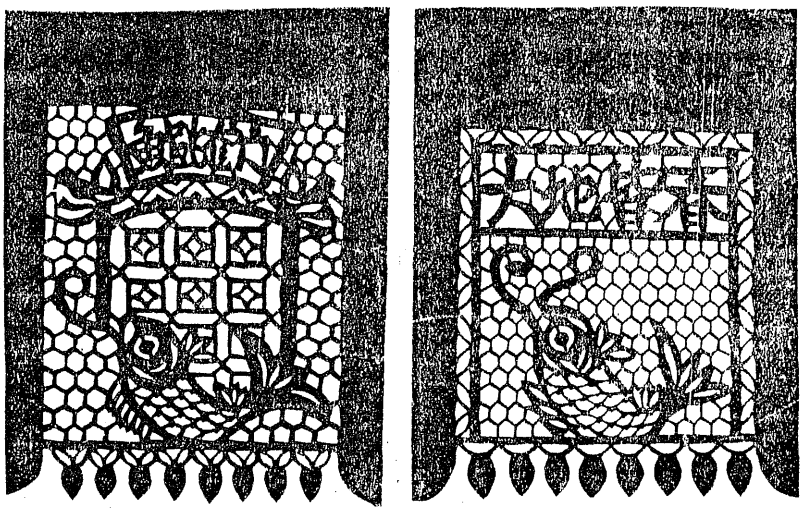


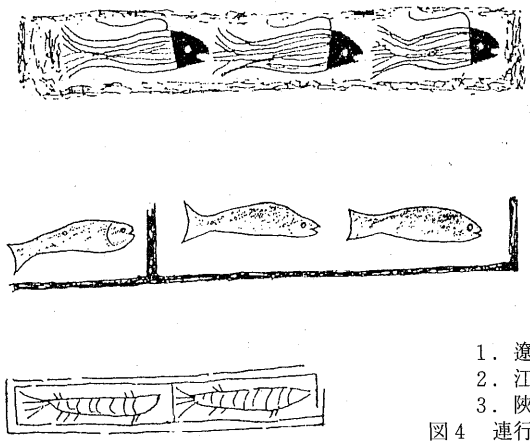
図３　魚跳龍門　民間挂箋　江蘇宝応

物を浄めるものとして，穢れを祓う機能を果たす。

中国漢代画像石中の“連行画”，即ち一字を並べ分け，始めから終わりまで連なった遊魚の図案（図４）は，たたりを駆逐し墓を守る性質を具えている。雲夢睡虎地出土の秦簡『日書』の“連行”は基本的に鬼を退治する法である。中古の門戸とタンスの魚かんぬき，魚鍵，魚形のノック等は魚が邪を祓い夜を守護する信仰に出ており，建築物の正棟上の鴟尾・蚩吻の制（しゃちほこ）は住居を清め火から守る願いを寄せたものである。

日本の古建築にも鴟尾の制があって，遅くとも奈良唐招提寺金堂より，これをみることができる。日本の鴟尾の制は中国より伝播したものである。鴟，トビの属は“おっぽがそろって”おり，“舟の舵のよう”であり，“よくくるくる飛翔”するのは，鳳凰の“魚のおっぽ”及びよくくるくる飛翔するのと似ているため，漢代の鳳凰に取って代わり，家の棟上の安寧を祈願する飾り物になった。中唐以降には“摩羯”紋の蚩吻（図５）が現れたが，その魚形構図は更に突出しており，同時に“火災を避ける”鎮物に転易した。

摩羯は元もと印度の河神で，梵語の makara の音訳であるが，その形象は中国で改造され，中国の伝統的な魚図と融合し，魚と龍の合体式の特徴を形成した。しかし，象の鼻，巨歯の頭部の元の容貌は保留している。このような印度文化と組み合わされた魚物は，中国を経て琉球等の地に伝わった。琉球博物館収藏の『進貢船図』には，大船の船頭が魚の頭でできており，中型の船の船頭は“摩羯”の形で描かれている。明らかに，“呑啖一切”の性質を借りて邪を祓い禍を取り除くという意味であり，海上の安寧を願ったものである。これ以外に，インドネシアのバリ島では，木棺で死体及び骸骨を納める。木棺の多くは各種の獣の形で彫られているが，普通の人の木棺は半象半魚形である。同様に，摩羯紋を邪を祓い祟りを駆逐する鎮物とした。バリ人は棺木を冥河に引き渡す乗り物と見なし，魚神にたよって死体を守り魂を安寧にさせようとしたのである。



1．遼南地区出土
2．江蘇邳県出土
3．陝西戸県出土
図4　連行図

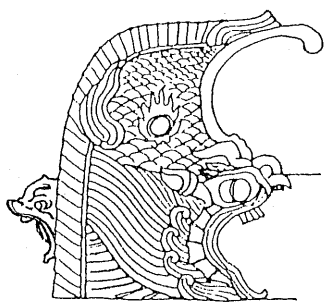


図5　蚩吻　遼薊県独楽寺山門

韓国でも魚形の鎮物は広く応用されている。太鼓の三色魚紋太極図と中国石器時代の屈家嶺文化網墜上の陰陽魚紋は相似しており，八卦上の太極図とも似通っている。十九世紀になっても，韓国の木製化粧箱には相変わらず魚文化の痕跡が残っている。その包角の銅飾片は魚尾形をなしている。中国吉林集安県禹山1080号高句麗古墓に出土した魚尾形鎏金銅帽飾（図6）からみても，魚尾紋は朝鮮人が踏襲し風習とした信物であり，護身・護物の神性を付与されたものと言える。魚尾の機能もまた邪を祓い祟りを退けるところにある。中国湘西南苗伺地区では年越しのときに，壁に生魚の尾を貼り付ける習慣がある。これは漢人地区で春節のとき，門神を貼ったり，桃符を掛けたり，爆竹を鳴らしたりするのと同様であり，鬼を祓い家を浄めようとするのである。魚尾は邪を祓う鎮物として広く伝播し複雑に変形されている。前述の“鴟尾”の魚尾形の制もこのような象徴意義がある。魚物を辟邪の鎮物とするのは東方魚文化の中で，もう一つの突出した要素を構成している。

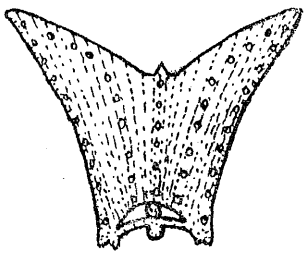


図６　高句麗魚尾形
鎏金銅飾片

東方魚文化体系中，自然魚と文化魚は，祈年求穣の象徴，魚を誘い網に入れる法物，大地を載せて支えている神獣占いをあてたり兆をみたりする霊物として，物質・精神・制度領域の多様な機能がある。それは，不断に変化発展する歴史範疇として，始源性・外桁性・内化性の３種の機能傾向を具えており，これより，複雑な行為モデルが派生する。中国魚文化は東方魚文化体系の基礎であり，それは，融入と化出によって，アジア大陸地区の民族の魚文化と長期にわたり交流し，機能・形態・モデルが相似している文化体系を形成した。本稿では，この文化体系中の三つのテーマを略述した。小論が東方（中・韓・日各地）の学者の方々が魚文化を深く探究する一つの契機となることを願う次第である。

〔注〕

1．『山海経・海内南経』に「氐人国在建木西，其為人人面而魚身，無足」と記載されている。『海内北経』によると，陵魚は“人面手足，魚身”である。『大荒北経』によると，漁婦は“偏枯”，“復蘇”である。
2．『淮南子・墜形篇』では次のように述べている。「後稷墉在建木西，其人死復蘇，其半魚在其間。」
3．高唐魚が白魚に変わり，人妻として女形で現れる伝説は『三峡記』に記載されている。又，『太平広記』巻第469を参照。
4．懶婦魚が楊氏家婦から変化したことは『述異記』に記載されている。又，『太平広記』巻第465を参照。
5．孟姜女が秦皇をからかい，投水し銀魚となった伝説は蘇南で広く流伝している。“銀魚”は“人魚”の音のなまりで，孟姜女の形象特徴と“海人魚”は似ている。陶思炎「人魚与孟姜女」『郷土』1986年第２期参照。
6．黄任遠「赫哲族的原始宗教」『民族研究』1989年第２期参照
7．『中国神話』第一集　中国民間文芸出版社　1987年度より引用。
8．（ソ連の）托卡列夫『世界各民族歴史上的宗教』第三章　中国社会科学出版社1985年５年版参照。
9．前掲（８）
10．『古事記』上巻「イザナギノミコトとイザナミノミコト」を参照。
11．『玄中記』では次のように述べている。「天下之多者，水也。浮天載地，高下無不至，万物無不潤。」周亮工『書影』巻七には次のような記載がある。「天河両条，一経南斗中，一経東斗中過，両河随天転入地・・・地浮于水．天在水外・・・」
12．陶思炎『中国魚文化』第三章　中国華僑出版公司1990年版参照。
13．林向「大渓文化与巫山大渓遺跡」『中国考古学会第二次年会論文集』文物出版社1982年　参照。

14. 琴高については漢・劉向『列仙伝』巻上，子英については『列仙伝』巻下，をそれぞれ参照。

15.『世界風物誌』23『日本』（台湾）地球出版社　民国68年版　参照。

16，17.『東亜民族的歳時風俗和儀典』（ロシア語版）モスクワ“科学”出版社1989年参照。

18. 唐・除堅『初学記』巻三十参照。

19.『日書』では次のように述べている。「道，令民　麗（罹）凶央（殃）。鬼之所悪：彼定臥，箕巫，連行，奇（踦）立。」

20. 桂馥『札朴』巻五に次のように記載されている。「鴟，鷹類，尾斉，届殿鴟尾象之。喜回翔而不甚高。」

21. 唐・慧琳『一切経音義』巻四十一に次のように記載されている。「摩羯者，梵語也。海中大魚，呑啖一切。」

22. 報告は『考古与文物』1983年第2期参照。

23. 前掲（12）参照。

（荒屋　豊訳）

新刊紹介

陶思炎著
『中国魚文化』

今年，先輩，陶思炎氏の博士論文である『中国魚文化』が中国華僑出版社から出版された。民俗学的視点から中国の魚文化を専門課題としてシステム的に研究した初めての本である。著者は豊富な古代文献と考古学の成果に基づき中国魚文化の歴史的脈絡及びその未来の発展傾向を指摘した。本書の内容は，1章序論（中国魚文化の概況，中国魚文化の機能と特徴），2章意味の解釈（魚を捕らえる技術，魚食の作り方，魚に関するタブーなど），3章機能的分析（中国魚文化のトーテミズム機能，性的象徴や宗教的巫術などを提示），4章魚の謎（魚類献賓などの諸神話，伝説と物語），5章中国魚文化の発展の歩み（変遷の歴史的歩みと変化の原因），6章現実的遺存（中国魚文化の現状及び未来の発展傾向）から成る。

著者は中国魚文化の特徴をその基礎構造である漁農経済と関連させながら分析し，中国人にとって魚文化は最も包括的カテゴリーであり，かつまた基本的な生活様式であると指摘した。一読した限りでは，魚はほとんど中国人の衣食住の各分野に及んでおり，魚文化は中華文化の最古の形態であり，商，周代から現在まで伝承されて来たという著者独特の主張をしている。なお，中国魚文化の今後の発展傾向について著者が4つの意見を提示した。即ち，1は総体的に見れば中国の魚文化の機能は衰退する傾向あるが，その一部の機能は依然として保存されて行く。2は，魚文化の商品装飾などの物質的実用機能がもっと拡大される。3は，現代文明の発展につれて魚信仰などの精神的機能は衰退する。4は，魚文化は民族文化の古い伝統として今後の研究者たちにもっと注目されるという。

本書は中国魚文化研究の最新の成果として今後の研究者達に注目される重要な参考文献となるのは確かである。

（色音）

B 6判　208頁

中国華僑出版社　1990. 5.